

かんざし

おんなの　こが　いけの　ふちから　みずの　なかを　のぞいて　おりました。  
みずの　なかには　いっぴきの　さかなが　しずんで　おりました。

「あっ」

と　おんなの　こが　さけびました。かんざしが　おんなの　この　あたまから  
ぬけて、いけの　なかに　おちたからで　あります。

かんざしは　さかなの　そばに　しずんで　きました。

「さかなさん、かんざしを　ひろって　ください」

と　おんなの　こが　さかなに　たのみました。

「これは　なんですか」

と　さかなは　ききました。

「それは　かんざしと　いって、あたまに　さすものです」

と　おんなの　こは　おしえて　やりました。

「だいじな　ものですか」

「ええ、わたしには　だいじな　ものです」

そこで、さかなは　よくが　でました。かんざしを　じぶんの　ものに　したいと  
おもいました。

「わたしは　ひろって　あげません。じぶんで　おひろいなさい」

おんなの　こは　こまって　しまいました。みずは　ふかいので　とても　じぶ  
んで　ひろう　ことは　できません。おんなの　こは　なきながら　いって　しま  
いました。

さかなは　たいへん　とくを　したと　おもいました。

「ひとつ　あたまに　さして　みよう」

と　いって、かんざしを　さして　みました。そして、その　とき、じぶんの　あた  
まには　かんざしは　させない　ことが　はじめて　わかりました。

そして　また、ほかの　ひとには　とうとい　もので　あっても、じぶんには  
ちつとも　とうとくない　ことも　あるのだ、と　いう　ことが　わかりました。

つぎの　ひ　おんなの　こは　また　いけの　ふちに　やって　きました。

さかなは　かんざしを　くわえて　みずの　うえに　うかびました。

「わたしが　わるう　ございました。さあ　かんざしを　おかえしします」

おんなの　こは　どんなに　よろこんだ　ことでしょう。なんども　なんども

おれいを いただきました。

底本\*「新美南吉童話集 1 「ごん狐」

著者\*新美南吉

出版社\*大日本図書

出版年\*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用\*1996年9月1日第10刷発行

入力\*安城市中央図書館職員